

163. 近江八幡市北東部における 2・3の竪穴住居について

1. はじめに

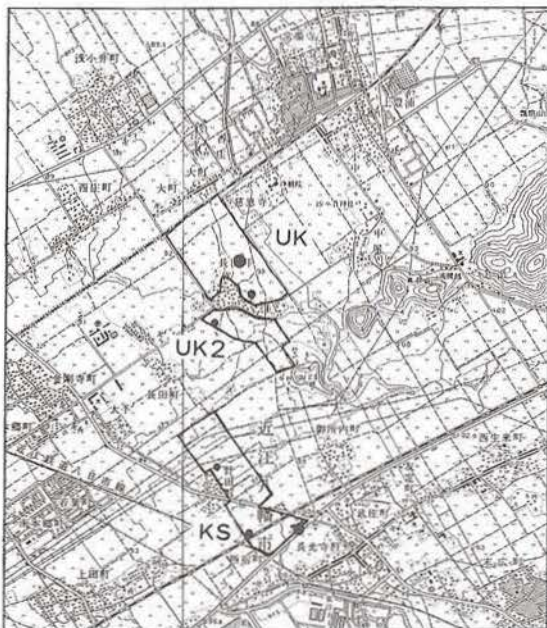
昭和62・63年度の2か年にわたって、県営ほ場整備事業に伴う事前発掘調査を、近江八幡市北東部において比較的連続的に実施してきた。その中で、今まで未報告であった竪穴住居が昭和63年度調査において3遺跡6地点で13棟確認されたので、ここに速報として記すものである。

2. 位置とこれまでの状況

調査対象地は、安土町との境界線に接した長田町～長光寺町にかけての地域であり、近江八幡市域の最北東辺にあたる。周知の遺跡である高木遺跡・後川遺跡・金剛寺遺跡・大手前遺跡・上下遺跡の5遺跡を縦断する結果となり、その空白部分をも多く含んでいる。各遺跡は、高木、金剛寺遺跡では発掘調査例があり、概ね9世紀代以降であることが知られている。他の4遺跡については、古墳時代・中世の遺物散布地と記されているのみであり、今回の調査により遺跡の性格の一端が明らかにされたものである。したがって、これまでに対象地域における竪穴住居の確認例はないわけである。

ここで、周辺地における状況、特に竪穴住居の終末期について若干整理しておくこととする。

現在の近江八幡市中心部に位置する出町・九里氏館遺跡では、弥生時代後期～古墳時代前期の掘立柱建物で構成される集落が確認されており、先進性を示している。市域南部にあたる上田町を中心として存在する蛇塚・観音堂・観学院・柿木原遺跡では、弥生時代中期～古墳時代前期を中心として、観音堂遺跡では7世紀頃、観学院遺跡では7世紀中葉、柿木原遺跡では7世紀後半の竪穴住居が確認されている。上下遺跡の西方にある蔵ノ町・半田遺跡では古墳時代後半までの、また東方の常衛遺跡では6～7世紀代の竪穴住居が検出されている。いずれにしても、観学院遺跡に見られる様に、7世紀中葉には掘立柱建物が住居形態の主流となり、竪穴住居は急速に衰退する傾向がうかがわれる。



第1図 調査対象地(黒丸は竪穴住居検出地点)

UK：後川遺跡 KS：上下遺跡

安土町内では、新開・慈恩寺・小中遺跡で弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴住居が多数確認されているが、中屋・老蘇遺跡においては、掘立柱建物と共存する奈良時代の竪穴住居が確認されている。類例は少ないが、前述の近江八幡市域とは終息時期にずれがあることが指摘される。

3. 各遺跡における状況

竪穴住居は、後川遺跡において3地点7棟、大手前遺跡において1棟、上下遺跡において2地点4棟確認されたが、後川遺跡と上下遺跡のものについて、以下その状況を記す。

(1) 後川遺跡

当遺跡は、長田町集落を中心とするものであり、北側(UK)で2か所、南側(UK2)で1か所検出された。

まず、北側T8として設定した約600㎡の調査区東半において5棟の竪穴住居が検出された(UK-T8-SH1～5)。西半部分は中・近世の土壌・溝を主としているが、全体に散在するピットには、竪穴住居とはほぼ同時期の遺物を含むものがある。ただし、明確な建物としては捉えられないものはなかった。5棟のうちS

H2は床面がわずかに残存していたのみであり、SH4についても南西隅がわずかに検出されたのみであるので、ここではSH1・3・5の3棟について記述する。

SH1は、東西3.8m、南北4.3mを計り、主軸方位はN-10°-Wを取る。床面には、4か所不整形の落ち込みが認められるが、深さは数cm前後と浅く、これらの埋土である暗黄茶色砂質土・黒褐色土混合土上面を床面と考える。床面には柱穴は認められず、東辺にカマド痕が2か所見受けられる。カマド痕は、深さ約10cmの床面掘り込み部分のみであり、焼土・炭化物の堆積がある。東辺中央部の方が古く、新しいものは南側に隣接して構築されているが、いずれも壁面より若干突出している。

遺物は、北西隅床面とカマド痕を中心として出土している(第2図)。1は、土師器の坏である。口径・器高は19.0cm・5.0cmを計り、器高指数は26となる。口縁部はやや外彎気味にのび、端部を垂直におさめる。内面は、底部にラセン状暗文が3重に、口縁部に2段の斜方射状暗文が施されている。外面は、口縁外には横方向のヘラミカキが施され、底部はヘラケズリののち指頭圧痕によって整形されている。

2~4は須恵器類であり、3と4はセットとなる可能性が高い。2は高台を有しない坏身であり、焼きひずみが著しいが、口径11.6cm、器高3.9cmを計る。回転ヘラ切りの後未調整の底部は丸味を帯び、口縁部は外方へ長くのびる。3は口径15.0cmを計り、天井部は緩やかに内彎し、扁平な宝珠つまみを持つ。端部は垂直にのびるが短く、鈍い。4は、口径14.5cm、器高4.3cm、高台径10.0cmを計る。口縁部は直線的に外方へのび、高台は断面長方形のものであるが、つくりは粗雑である。土師器と須恵器に時間差が認められるが、概ね8世紀初頭である。

SH3は、南北3.5mを計り、東半は調査区外にのびている。主軸方位はN-20°-Wを取り、SH1とは異なる。底面にはピット・不定形の土壌状落ち落みがあり平坦ではないが、黒色土・暗黄茶色系土混合土を貼床とし、この上面では平坦となる。ピットは掘り込みが浅く、平面形にもばらつきがあることから、主柱穴とは考えにくい。検出部分においてカマド痕は認められないが、東辺につくものと想定される。

SH5は、T8で検出された中では最も規模が大きく、残りも良好なものである。南北4.8m、東西5.0mを計り、N-17°-Wを主軸方位とする。東辺中央部やや南寄りにカマドがつき、若干プランがくずれているが、概ね正方形を呈する。西辺からコの字状に幅約60cmの壁溝が巡っているが、北・南辺中央部において浅くなり終息している。床面はほぼ平坦であり、主柱穴が4

か所認められる。カマドは、両裾部・天井部の1部が残存しており、掘り込み底面から推定天井部までの高さは約50cmとなる。底面には支柱石痕が認められたが、煙道は確認されなかった。カマド南裾部から南辺の間には、貯蔵穴がある。長辺1.8m・短辺0.8mの隅丸長方形を呈し、主柱穴の1つが切り込んでいる。

出土遺物は、貯蔵穴内を主体として、北西隅壁溝内、カマド内埋土から検出された(第2図)。

5~10は、いずれも貯蔵穴から出土したものであり、5~7は須恵器、8~10は土師器である。5は、口径12.0cm、器高4.3cmを計り、SH1出土のものと同様である。6は高台を有するもので、口径18.7cm、器高5.0cmを計る。口縁部は直線的に外方へのび、高台は断面長方形であるがやや丸みを帯びる。7は、焼成の甘い須恵器の鉢である。底部外面は回転ヘラケズリによって整形され、口縁部は外面を若干立ち気味に肥厚させて端部を明瞭にさせている。口径・器高は、16.0cm・10.5cmである。8・9は、小型の甕形土器である。8は、口径12.6cmを計り、口縁部は直線的に外方へのび、胴部は球形に近くなると想定される。肩部には1条のヘラ描き沈線が巡り、上半はタテハケ・下半は下から上へのヘラケズリが施される。胴部内面には、ヨコハケが顕著に残存している。9は若干いびつであるが、口径10.7cm、器高14.0cmを計る。外彎気味の口縁端部は、若干上方へつまみ上げておさめる。胴部は最大径である肩部から直線的にひろがり、丸底の底部となる。外面はタテハケ、内面はナデによって調整され、底部には指頭圧痕が著しい。10は長胴甕の口縁部であり、緩やかな受口状を呈し、端部は単純におさめている。図示していないが、壁溝内からはかえりを有する須恵器坏身、長頸壺、長胴甕が重なりあって出土している。これらは、概ね8世紀前半に相当する。

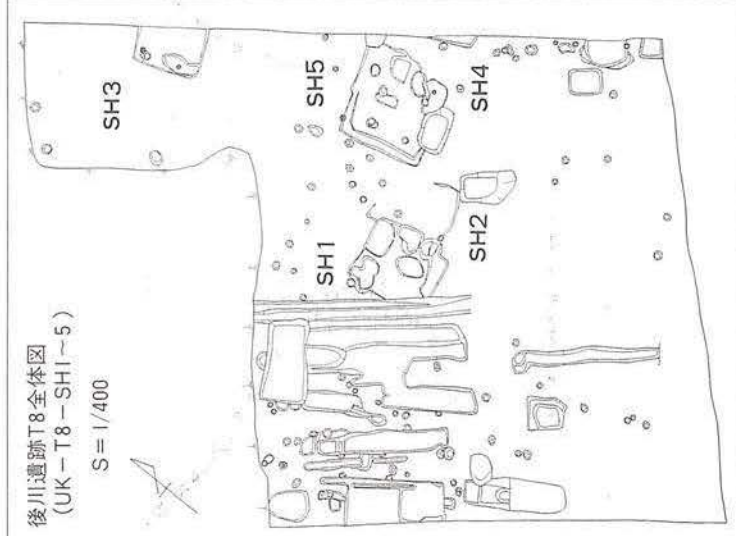
T8の南に位置するT9においても、1棟検出している。1辺約6.5mを計る正方形のものであり、東辺にカマドを持つ。床面には4か所の主柱穴が確認されており、土師器小片のみの出土であるが、T8とはほぼ同時期と想定される。

以上の竪穴住居からは、2・3の傾向を読みとることができる。まず、床面積からT8-SH1=16㎡、T8-SH2・SH3=12㎡とT8-SH5=24㎡、T9-SH1=42㎡に大別され、大型のものについてのみ、4本の主柱穴が存在することである。このことから、床面積と建築構造に差異があったことがうかがわれる。と同時に、大型のものを中心として集落が構成されていたであろうことが想定される。また、当地点においては、カマドが東辺中央部につくことがあげられる。

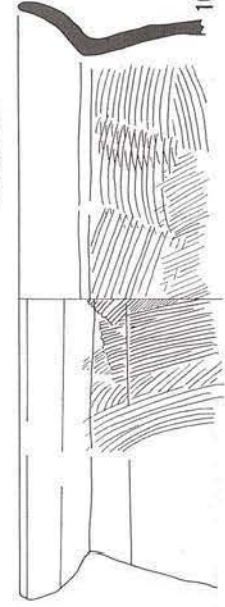
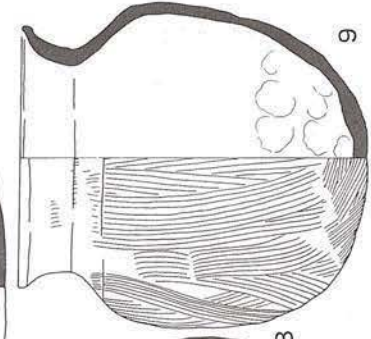
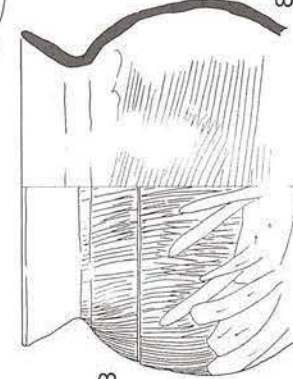
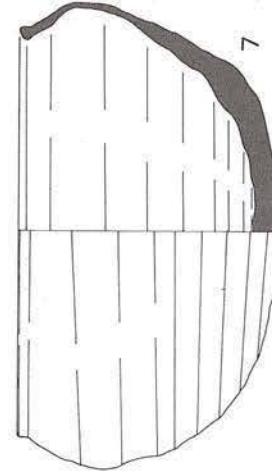
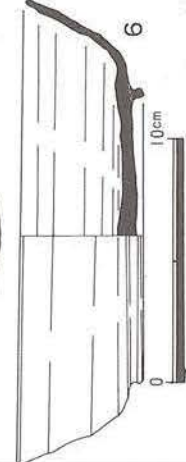
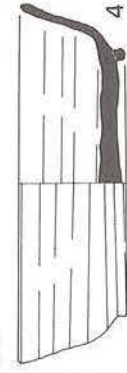
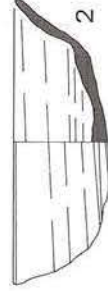
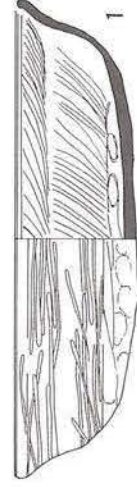
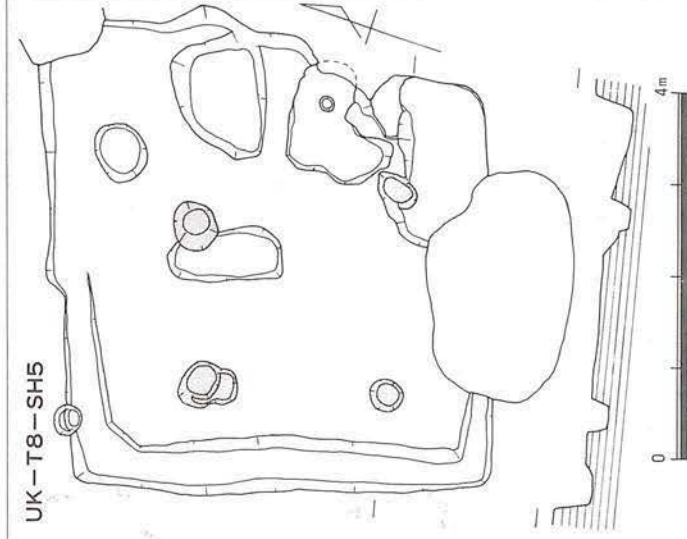
一方、集落の南側のT1からは、布留式併行期の竪穴住居が検出された(UK2-T1-SH2)。当初規模は

後川遺跡T8全体図
(UK-T8-SH1~5)

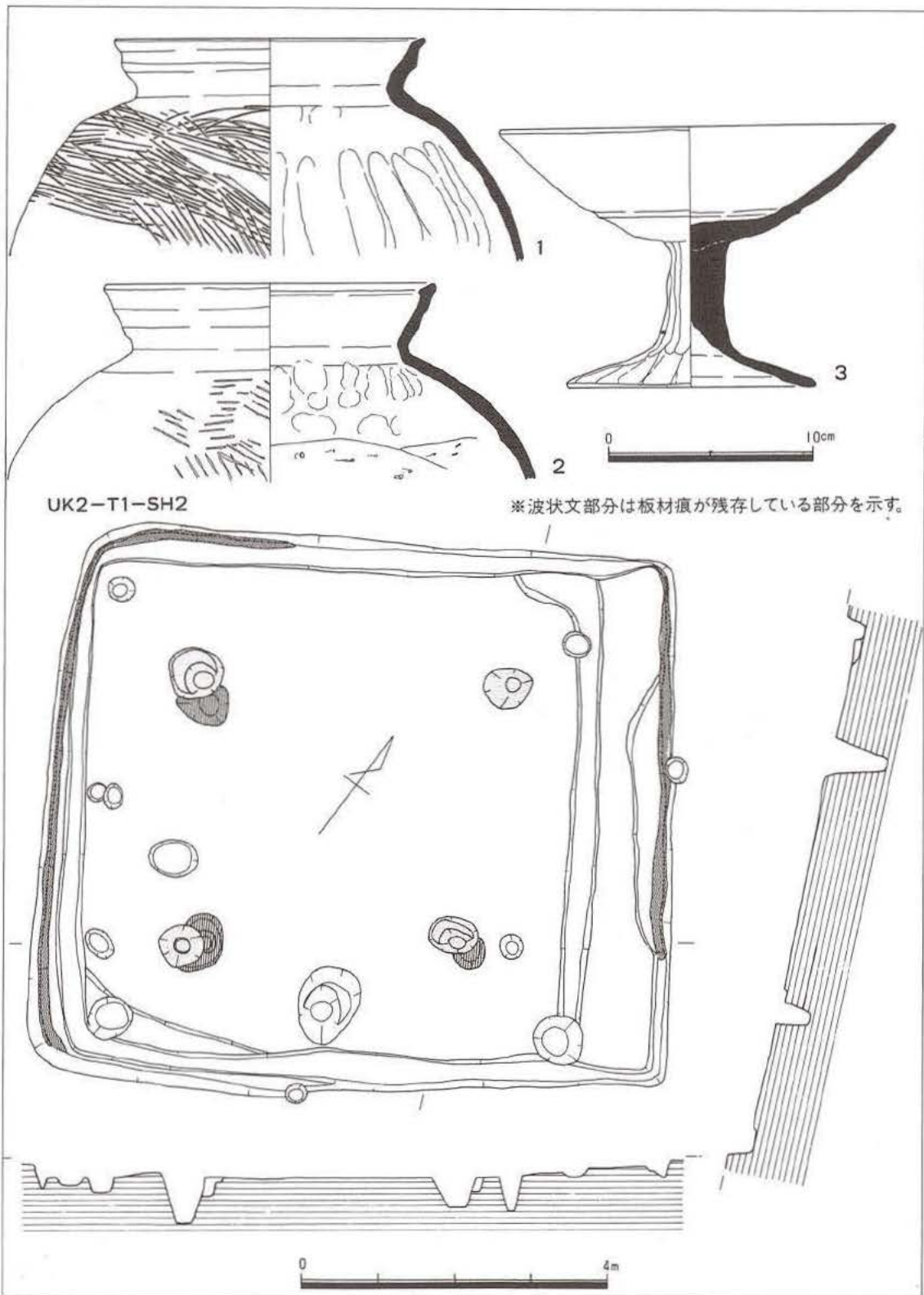
S = 1/400



UK-T8-SH5



第2図 後川遺跡(UK)竪穴住居・出土遺物実測図



第3図 後川遺跡(UK2)竪穴住居・出土遺物実測図

7.2m×7.2mであり、東辺を拡張して建て替えが行なわれ、8.0m×7.2mの長方形になっている。いずれにも壁溝が伴い、拡張後の西・東壁沿いには、板材の打ち込み痕と想定される幅数cmの落ち込みが確認されている。4か所の支柱穴の位置はほぼ踏襲しているが、北西・南西・南東の隅部分、柱穴の対角線上にしっかりした柱穴が認められる。西辺にはこれらの中央部にも同様の柱穴が存在する。これらは、拡張時のものに伴うものであり、内部構造に差異が認められる。南辺中央部には、径約1m、深さ約1mの土壇がある。中央部に焼土が認められたが、床面からかなり上位に位置しており、明確な屋内炉跡は検出されなかった。

遺物は埋土内から一様に出土しているが、北辺壁溝内において受口状口縁甕形土器・高環形土器・壺形土器底部がかたまて出土している。遺物整理がほとんど進んでいないので、ここでは比較的残りの良いものを図示する(第3図)。1は、壁溝内から出土した受口状口縁甕形土器である。口径は15.0cmを計り、口縁端部を外方へ突出させるが頸部は緩やかであり、内面ではわずかに内彎するにすぎない。胴部は球形に近く、外面は粗いカキメ調整が施されている。口縁部内外面はヨコナデ、胴部内面は指頭によるナデアゲによって平滑に仕上げられている。同様のものは、他に3個体程度出土している。2は、布留式の特徴を有する甕形土器である。口縁部外面はナデによって若干波打っており、端部は肥厚させて内傾する平坦面を有している。胴部外面にはタタキメが残存し、ハケメは認められない。内面は頸部にやや面を持ち、上位約 $\frac{1}{4}$ は指頭圧痕とナデ、それより以下はヘラケズリによって調整されている。他に数個体分出土しているが、胴部下外面は、ハケメ調整が認められる。3は高環形土器であり、口径19.4cm、器高13.0cmを計る。坏部はやや内彎気味にのび、外面にわずかな段を形成する。脚部は、裾部が大きく屈曲してひろがり、端部は単純におさめる。坏部との接合は、円盤充填法による。調整は坏部がヨコナデ、脚部外面はヘラケズリ的な幅の広いヘラミガキである。高環形土器は他に数個体分出土しているが、壁溝内出土のものは、口縁端部を外方へ突出させておさめている。他には、単純くの字状口縁の小型の甕形土器、小型丸底壺形土器が各々数個体分出土しているが、須恵器は含まれていない。

この竪穴住居は、周辺地における当該期のものが、大型のもので一辺6m前後であることと比較すると1m～2m大きく、床面積にして20㎡以上広いものである。周辺に当該期の集落が存在していることが予想されると共に、構造的にも検討の余地が残されている。

(2) 上下遺跡

長光寺町北側にひろがる遺跡であるが、今回の調査

対象地は大手前遺跡と上下遺跡の間にあたり、遺跡地図上は空白地となっている部分である。

半田遺跡と接したT7においては、重複した2棟の竪穴住居が検出された(KS-T8-SH1・2)。SH1は、東西4.2m、南北4.6mを計り、N-25°-Wを主軸方位とする。西・南辺には浅い壁溝が巡り、カマド痕は北辺と東辺北端の2か所認められる。新・旧は未検討であるが、いずれも掘り込み部を残すのみである。東辺のものについては煙道が残存しているが、いずれにしても壁面に接して屋内におさまるものである。

SH2は東辺を踏襲したものであり、東西4.1m、南北3.3mを計る。東辺中央やや南寄りにカマド痕があり、床面には支柱穴・壁溝は認められない。出土遺物は、SH2に伴うと考えられる(第4図)。1は須恵器坏身で埋土内、2は土師器皿でSH2のカマド内埋土から出土したものである。1は口径11.8cm、器高3.5cmを計り、底部は回転ヘラケズリのまま未調整である。2は口径21.0cm、器高2.5cmを計り、口縁端部は肥厚させて丸くおさめる。底部外面は指頭圧痕とナデによって調整され、内面には底面から口縁部にかけて斜方射状暗文が1段施されており、概ね平城II～III期に比定される。

T7の東方に設定したT11からは、3棟の竪穴住居が検出されたが(KS-T11-SH1～3)、SH3は残りが悪いので、ここではSH1・2について記す。

SH1は、推定1辺4.6mを計り、N-20°-Wを主軸方位とする。北辺中央部に、残りの良好なカマドが検出された。掘り込み部には支柱石痕があり、若干壁面から突出している。出土遺物は、カマド西側裾部周辺から主として検出されている(第4図)。3～5は須恵器、6は土師器である。3は口径12.0cm、器高3.7cmを計り、底部はやや丸味をおびる。4は口径15.9cmを計り、天井部は緩やかに内彎し扁平な宝珠つまみを有する。端部はわずかに突出し、断面三角形を呈する。5は断面が扁平な台形を呈する高台を有する坏身であり、口径14.4cm、器高3.8cm、高台径10.2cmを計る。口縁部はやや内彎し、端部は単純におさめる。6は片口鉢であり、短径17.0cm、長径20.5cmの楕円形を呈する。口縁部は、ヨコナデによって単純におさめられている。外面は上半がタテハケ、下半がヘラケズリであり、内面は一面にハケメが施される。概ね平城I期に相当しよう。

SH2は、SH1に南辺を切り込まれた1辺4.6mのものである。西・南辺には壁溝が巡るが、床面に柱穴は検出されていない。

当遺跡では狭長なトレンチ調査であったため、面的にどの様な構成を取るかは不明である。しかしながら、後川遺跡の状況に近いと想定される。床面積は、T7-SH1=19㎡、T7-SH2=14㎡、T11-SH1・2=21

m²であり、柱穴を有しない点は、UK-SH1~5と同じである。

4. まとめにかえて

本格的な遺物整理・検討を加えていないため、ここで多くを記すことはできないが、2・3の課題をかかげ、まとめにかえたい。

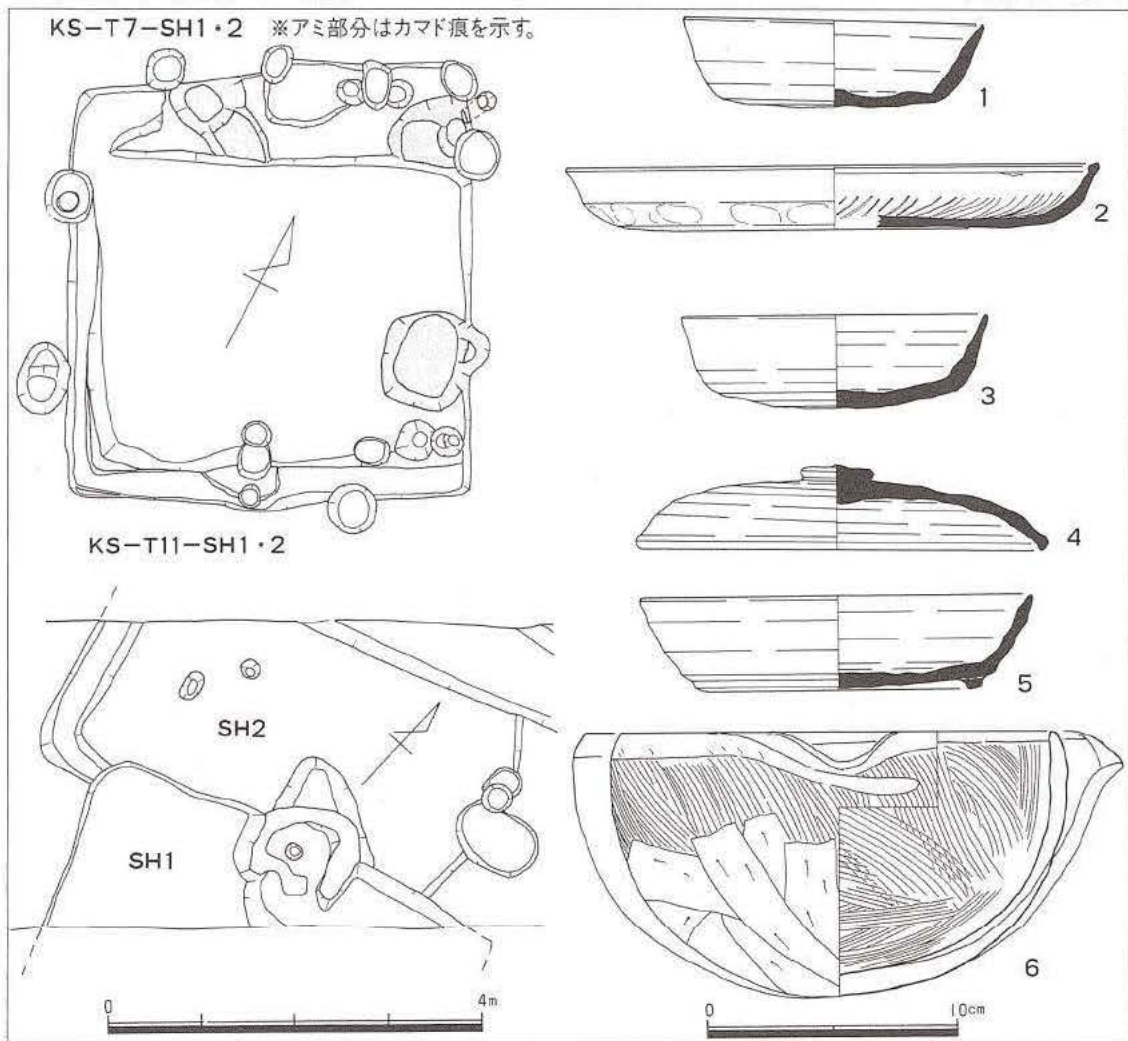
布留式併行期の竪穴住居は、県内一円において多数検出されているが、大型のものでも概ね1辺6m強であり、UK2-T1-SH2よりは約1m程度小さい。規模の比較だけでは何も言えないが、今後検討を加えることにより、弥生時代後期以降不明瞭である当地の様相が明らかにされることを期待したい。

次に UK-T8-SH1~5、T9-SH1、KS-T7-SH1,2、T11-SH1~3は、いずれも8世紀前半期の竪穴住居であり、掘立柱建物との共存の可能性はあるものの、主要な住居形態として継続していたことは明らかである。

かである。これらを1辺5~6m前後の大型住居が存在していた7世紀代のもものと比較すると、その規模は縮小していると言える。これに伴い、床面積20m²以下では支柱穴が認められず、構造的差異がある。

近江八幡市中央部以南においては、7世紀前半~中葉において掘立柱建物集落に転換する。一方以北においては、高月町井口遺跡・甲良町下之郷遺跡・蒲生町外広遺跡・安土町中屋遺跡・同老蘇遺跡等で掘立柱建物と共存した形で竪穴住居が検出されている。湖東・湖北においても湖南と同調する遺跡もあるが、その転換は一様ではなく、約1世紀にわたって残存する状況は湖南と大きく異なる点である。これに注目すると、今回報告した諸例を包括する地域は、むしろ湖北・湖東的であり、今後当地の歴史的な地域性を考える上で示唆的であると言えよう。

(小竹森 直子)



第4図 上下遺跡(KS)竪穴住居・出土遺物実測図